大宅寺〔勧修寺の北、大宅村の南にあり。古此所は大織冠鎌足公の居館なり。今は曹洞宗月坡和尚一宇を建て、大宅寺と号す。此里を大宅となづくる事は、閑院大臣冬嗣公の御孫高藤殿、秋のすゑ小鷹狩に出給ひ、山科のないしやの岡をつかひ給ふに。風雨頻にして雷なりければ、供人もちりぢりになり、此君は漸馬飼壹人供して、とある門の内に入給ひぬ。なほも風雨まさり雷恐しければ、今宵は此屋に宿り、十三四なる女のありしかば、かりに契りをこめ、佩給へる太刀一腰残しおき給ひぬ。其後六年を経て恋しく思ひ、此屋をたづね給ひければ、六つばかりをんなの子のいつくしきが立出て膝に居けり。此児は誰ぞととひ給へば、一とせ立入らせ給ふ跡にて、たゞならぬ身になりて産侍る。此家の主は此郡の大領宮道弥益と聞て、これも前の世の契あらめと思召、御所につれて帰り、西の対におき給ふ。打つゞきをのこ二人誕生あり、高藤殿はやんごとなき人なれば大納言になり給ひ、男二人は泉の大将 其弟は三条右大臣、此姫君は宇多天皇位におはしますに、女御にまゐらせ、いくばくもなく醍醐の御門をばうみ奉りぬ。弥益は四位になりて家は今の勧修寺なり、むばの家には塔を建て大宅寺となんいふ。〔以上小世継物語の大意〕